

2月22日(日)



1パック

1,000円 (税込)

長崎ハーブ鯖
寿司盛り



西田鮮魚店

72-5246

御用聞き便専用番号 ☎090-7125-5489 (旧庄原市内はご自宅に配達)

西田鮮魚店 西浦龍矢

皆さんいつもありがとうございます。いつも元気いっぱい西浦です！最近寒波で大雪が降ったりと大変でした。僕は中、奥原さんと仕入れに行き、初めて一般道を通って行きました。正直疲れました。最近では、僕がこまかく愛する釣竿が折れるという悲劇がありました。藤澤さんに新しい奴を買えないのでは？と後押しをされて、新しいのを買ったにしました。

さてさて、今回の広告は長崎県産のハーブ鯖を生と炙りで、握らせていただきました。この鯖は環境に恵まれた長崎の海で育てられた鯖。新鮮で臭みがなく、四季を通じて旬の鯖料理を堪能いただける、まさに新しい鯖で、タンパク質や貧血予防や疲労回復など栄養要素が沢山はいつております。脂も沢山のつており、口の中に入れたら旨みが、広がっていきます。炙りの上には白髪ねぎと刻み生姜、ごまをかけており、ごまの香りが、より一層美味しくいただけます。

今回は舍利にも赤酢を使用する事により、鯖の旨みを更に引き立て、こだわりの強い商品となっております。皆さんもとても美味しい鯖のお寿司を食べて、幸せを感じてみてください。

さあ、本日も元気いっぱいお待ちしております。

『ジョイフル2.0は若い世代の力で…。②』

鮮コーポレーション(株) 代表取締役会長 西田 昌史



I 『三丁目の夕日』的ノスタルジーに逃げ込んだ

衆院選が終わった。自民党のというより高市さんの圧勝だった。中道改革連合の惨敗。いや壊滅だ。それも自滅。

新党の名前が『中道改革連合』？。思わず『全学連』『革マル派』『中核派』を連想してしまった。50年もそれ以上も昔の学生運動を。さらに略して『中革連』というから、ますます…。

数日して選挙ポスターが発表された。「だめだ、こりゃ」。

ポスターには野田・斎藤共同代表がイメージカラーのブルーをバックに、笑顔で右斜め上を見上げている姿が…。でも、私には、たぶん、狙いのはずの、希望にあふれた未来を見つめているというふうには見えない。どう見ても人のいいやさしい二人のおじいちゃんが、来し方を振り返り、「よう、がんばってきたよのう」と晴れやかに空を見上げているように見えてしまう。

テレビでユーチューブを見ることを覚えた私は、この一週間、ずっとユーチューブで選挙の情報を得ていた。テレビの番組を見ない孫たちの気持ちがあった。選挙の情報がごまんとある。テレビ局のような縛りがないから、好き勝手なことを言う。ここのまですべてええんか？。おもしろい。

そんな中で唸った。私を感じた「だめだこりゃ」をみごとに言い表した『X』への投稿が紹介されていたのだ。民主党などで衆議院議員を務めた山尾志桜里さんの投稿。彼女自身お騒がせ女性だったが、伊達に東大を出た弁護士ではない。「なるほど」だ。

山尾さんは、政党を商店に例えて、こう書き始める。

『今回、中道商店が集客できなかった原因を3つあげるなら、

①店長に覇気がない②一見客を大事にしない③買いたい商品が見当たらないということではなかったかと思います』

「なるほどなあ、たしかに」。魚屋の私には響いた。

①の『店長に覇気がない』についてはこう記す。

『自民党の高市店長（64才）が、加速する時代にくらいいつき自分をアップデイトするすさまじい努力と執念を見せる一方で、野田（68才）、斎藤店長（74才）コンビは『三丁目の夕日』的なノスタルジーに逃げ込み、むしろ時代にプレッシャーをかける存在に映った。そこに見えたのは残念ながら圧倒的な努力格差だったと言わざるを得ません。これは高齢批判とはまったく別物』

そのあと、②と③にもふれ、こうしめくくる。

『今回の中道大敗は自ら世代交代と路線変更ができなかった以上、いずれ選挙でこうなるしかなかった必然だと思えます。』

II 時代遅れ感がつきまとっていた

わたしがポスターを見て感じた『ふたりのおじいちゃんが昔を懐かしむ』かのような印象は、山尾さんが指摘する『三丁目の夕日的なノスタルジー』なんだ。うまい！

『ふたりのおじいちゃん』と呼ぶ、当の私も5月で74才になる。斎藤さんと同じ1952年生まれ。りっぱに『おじいちゃん』だ。自分では自覚はないのだが『おじいちゃん』。お二人と一緒だ。

野田さん自身が大敗後のインタビューで話していた。

「時代遅れ感がつきまとっていた」と。本人も自覚していたのだろう。言葉が周囲に響かないことに。

刻々と劣勢が伝えられる選挙の中盤からは、よけいにそんな思いにとらわれていたのではないかと思う。

これが40代だったら、50代だったら、迷いながらも、落ち込みながらも、それはね返そうとする自分がいた。それがなくなつた。やる気もある、元気もある。だが、あの頃あった体の底から湧いてくるようなエネルギーが今はない。

そして、致命的なのは、時代についていけない自分に気づかされること。あのころは自分の存在自体が時代そのものだった。時代の流れなんて考える必要なかった。時代とともに生きていた。

しかし、今は「なに、それ？」だ。言葉が理解できない。スピードについていけない。

テレビ、新聞に一方通行の情報を求める私たち世代と、それをオールドメディアと揶揄し、スマホを駆使しSNSで双方向の情報の渦の中で生きる若い世代。

「私たちには経験がある」と強がってみるが、令和の価値観は昭和のそれと真逆だったりする。パワハラだ、セクハラだ、働き方改革だ。「なんで？」「なにが？」「そんなばかな」。

III 働いて働いて働いて働いて働いて働いてまいます

が、しかし、高市さんも64歳だ。野田さんとは4歳しか違わない。立派に私たち世代のはずだ。なのに、20代、30代に支持されているという。なにが違う？なにが彼らに刺さっている？わからない。ただ、私自身も、彼女の言葉、彼女の生き方に共感しているのも確かだ。彼女の何がそうさせるのか知りたい。

彼女の本を読んだ。実に具体的だ。彼女の目指す日本の形が見えてくる。かつてこんなにも政策を詳細に掲げ、裏表なく真摯に選挙を戦った総理大臣がいたろうか。オールドメディアは、選挙の間じゅう、いや、終わってからでも政策が見えないと非難していたが、何を見ていたのだろう。

山尾さんが指摘しているように高市さんへの支持は、彼女の『圧倒的な努力格差』がもたらしたものだだろう。それが「働いて働いて働いて働いて働いてまいます」になったのだろう。時代に逆行するかのような言葉のはずなのに受け入れられた。それは自分に向けられたものだから。他人に向けたとたん、攻撃の矢がとんでくるのかもしれない。

リーダーとしての高市さんの真骨頂だろう。

IV 古い船をいま動かせるのは古い水夫じゃないだろう

先週のこのチラシの裏を私はこうしめた。

『74才になる私はジョイフルの解体まではやりとげたい。そのあとは若い世代に委ねたい。新しいリーダーたちに』。

68才で会社の運営を長男に委ねてからずっと、私の頭の中ではよしだたくろうの『イメージの詩』の一節が流れている。

♪古い船には新しい水夫が乗り込んでいくだろう

古い船をいま動かせるのは古い水夫じゃないだろう

なぜなら古い船も新しい船のように新しい海へ出る

古い水夫は知っているのさ新しい海の恐さを

古い水夫の私だ。もう新しい水夫にすべてを委ねた方がいい。その方がうまくいく。彼らは優秀だ。今の私より。

実際、38歳の息子が率いる鮮コーポレーションは、新しい取り組みをどんどん始めている。アップデイトしている。私はもう着いていけない。新鮮市場だって、40代の祐宗店長、越道副店長が引っ張って活気ある営業を続けてくれている。彼らにはエネルギーがある。覇気がある。

ただ、航海できないほどに古くなったジョイフル号は解体するしかない。それは古い水夫の仕事だ。私たちの仕事だ。

しかしその先、どんな船をつくるのか。どんな海に出て行くのか。それは新しい水夫の仕事にちがいない。

『コンパクトシティ』なのか『道の駅』なのか『三次プラザ』のようなモール』なのか。私たちの思いもつかないものがあるのか。

若い世代に丸投げしたい。私はそっと眺めてみよう。



ジョイフル

♪青い空 明るい太陽
オシャレと楽しい 出会う街
ジョイフル ジョイフル
ジョイフル 永江